

朝を ひらく

それまで当たり前前に感じていたことが、ある時突然、何か変だと思いはじめることがある。

「なんでお寺に鳥居があるの？」「鳥居って、神道の象徴でしょう」。海外からの参詣者の疑問であった。その通り、自坊・真国寺の真ん前には、高さ10層もの大鳥居がドーンと建っている。欧米人の目にはそれはあたかも、キリスト教会の入り口に、イスラム教のモスクがあるように映ったのである。

鳥居の歴史について少し調べてみた。主要な説として、天照

お寺に鳥居

永田 円了
真国寺住職



大御神を天岩戸から誘いだすために鳴かせた「常世の長鳴鳥」にちなみ、神前に鶏の止まり木を置いたことが起源とされる。神社などにおいては、神域と人間が住む俗界を区画する門として使用されている。

真国寺の鳥居は、明治政府による廃仏毀釈などの影響で、明治17年に建立された。その後、二代富山藩主・前田正甫公の追遠を願って、売薬業の方々が出

資し、明治42年に当時の木造の鳥居が、現在の石鳥居に造り替えられた。

寺院境内に鳥居がある例は他にもあった。大阪の四天王寺の西門の鳥居、愛知の曹洞宗・妙厳寺(豊川稲荷)の参道にある大鳥居などである。6世紀に伝来した仏教と、日本古来の神道は世界的にもまれに見るいい関係を保ってきた。各家庭には仏壇もあり神棚もある。仏教も神道もおおらかなのである。

しかし、明治に入って雲行きが怪しくなる。物事に白黒をつけようとする欧米のデジタール思考が、本来おおらかでアナログ的なやさしさがある日

本文化に、「神か仏か」と迫る。

日本文学研究者、ドナルド・キーン氏は、祖国アメリカを離れ日本国籍までとって日本に住する決断をした。日本の魅力について、キーン氏は一番に奈良・室生寺の思い出を語った。「雨が降ってきて、寺から出てきたおばあさんが、次にいつ来るとも分からない私に傘を貸してくれた」

ちっちゃくてパーソナルな、でもほんわかと温かい日本文化のよさを、皮膚感覚で語った。冒頭に「何か変だ」と書いた。西洋文化の視点で見ると、二つの異なる宗教が同居する姿は確かに変である。でも日本文化はそれがいいのである。お寺に鳥居、神も仏も、このおおらかさがある限り、日本は大丈夫、大丈夫。

日本人のおおらかさ